

【コラム2】 フィールドで研究することの困難と快樂

石井英真（京都大学）

近年、質的研究、アクション・リサーチなど、現場に身を置きながら研究すること（フィールド研究）が広まりを見せています。教育学（学説）についての研究と、教育（事実）についての研究とは異なります。教育のアクチュアルな現実に対面し、事実を説明したり、問題の洞察・解決に関与したりする。これが教育についての研究としてのフィールド研究の意義でしょう。

ただし、フィールドに身を置くだけではフィールド研究は成立しません。しばしば研究者は、特定の研究方法論からのみ事実を切り取りがちです。また、特定の学説の言葉でその枠内で実践を理解しがちです。ところが、授業という営み一つとっても、それは教材や教具を介した、個人の認識や感情の変容に関わる心理的過程であり、権力関係の強化や編み直しを伴った社会的コミュニケーション過程であり、そして、生成的瞬間や緊張と弛緩を伴うドラマ的で実存的な過程でもあります。さらにそれは、学習の履歴としてのカリキュラムとの関係で解釈されるべき歴史性を持っており、また、公教育の制度的枠組みとしてのカリキュラム（教育課程）によっても規定されています。しかも、教育実践の主体である教師達は、学習指導要領などの制度的な言語と枠組みのみならず、そうした複合的な実践の経験を通して生み出された自生的な言語と枠組みも織り交ぜながら授業について語ります。

もちろん、特定の学説や学問分野別の研究方法論は、実践的問題に埋没せずに理論的問題を洞察しそれを厳密に検討していく上で不可欠です。しかし、既存の枠にとらわれずに教育の複雑な現実を捉えようとする泥臭さやがむしゃらさ、あるいは、実践主体であると同時に研究主体でもある教師達から学ぼうという謙虚さを欠くとき、フィールド研究はその本来の意味を失い、いわばフィールドで行う研究室での研究に陥ってしまうでしょう。

このようにフィールド研究は、本来的に困難と危機を伴う過程です。すなわち、教育の現実との格闘の過程においては、研究者としての教育への応答責任が絶えず問われ、既存の理論や学問分野の枠がゆさぶられ、研究者としてのアイデンティティーが問い直されます。その一方で、そうしたフィールドでの経験は、研究上の新たな着想の源泉ともなりうるし、現実の複雑さとの緊張関係の中で論理も鍛えられます。さらに、教育現実への応答責任を意識した研究を進める過程では、無力感の中に手応えのようなものも感じることができるようにも思います。こうした、研究者としての危機と快樂とが背中合わせの綱渡りの中にこそ、フィールド研究の醍醐味があるのです。